



保育研究の方法について

西本 脩

た。それは、保育の研究法がまちがっていたからです。実際の保育に役立つ研究をし、保育の効果をあげるためには、その研究の方法を更に研究してみなければなりません。従来保育学に対して、保育研究法を確立することが必要となってきたのは、そのためです。今回は紙面も限られていますので、個々の方法を詳細に述べることはできませんが、ごく重要な点を共に考えてみたいと思います。

二

先ず、保育研究法という言葉についてですが、この言葉はいろいろの意義に解されると思えます。ここでは、保育の科学的研究の方法という意味に解しておきましょう。この意味での保育研究とは、グッドの云っているように、「保育に関するすべての問題に対して得られる限りのもっともよい資料にもとづいて、批判的反省の思考によって解答することである」と定義してよいでしょう。つまり、保育に関して解決を要する現実問題が最初にあつて、これを解決するために、できる限り正確な資料を集め、それにもとづいて考察をめぐらし、実際の解決を与えようとすることなのです。そして、問題とは、いつも実際問題であり、解決とは事態の改善の方策です。ですから、保育研究は、保育学の体系を作ることが目的ではなく、一般的な法則・原理を発見することが第一義的な目的なのでもありません。目的はどこまでも、現実の事態を改善するための方策を発見することであり保育の實踐に計画性を与え、それを一層合理的、能率的にすることなのです。

最近、よくあちらこちらで保育の研究会

これまでの保育学は、一般の教育学と同様に、最初から保育の目標を定め、それを達成するには、何を(保育内容)、どのように(保育方法)することが必要であるかを考究し、いたづらに保育学の体系を作ることに熱中した傾向がありました。したがってこのような保育学は、保育の実際問題を解決するには、余りに一般的、抽象的にすぎて、実際には何の役にも立たないものとなつてしまし

が開かれますし、どこの幼稚園や保育所でも保育に関する研究熱が非常に高まってきており、自分も何か研究をやってみようと先生方が積極的になってこられたことは、保育界の発展のために、まことによるこぶべきことだと思います。けれども、うっかりすると、人がするから自分もするということになり、研究が一種の流行のようになってしまわないとも限りません。ですから、ここでもう一度、私達は一体何故保育研究をしなければならないのか。何のために保育研究をするのかということを考えてみなければなりません。私はよく幼稚園や保育所の先生方から、つぎのような相談をうけることがあります。

「先生、私の幼稚園で今度研究保育があるのですが、どんな問題をとりあげたらいいでしょうか」

「先生、私はうんと研究をして、少しでも保育界にお役に立ちたいと思いますが、どんな研究をしたらいいでしょうか。現在の日本の保育界において、もっとも重要な問題は何かでしょうか」

「先生、今度の研究会には、園を代表して

私に研究発表をするようにと園長先生から云われ、一旦お断りしたのですが、『みんな順番にやってみようので、今度はあなたの番ですよ』とのことで、私がしなければならなくなったのですが、何かよい研究テーマはありませんでしょうか」などと。

こんな時には、どう返事をしたらよいか全く困ってしまいます。断ってしまうのは、余りに気の毒だし、そうかと云って、先方の園の事情もよく知らない私がすぐに適切な問題を思いつくこともできず……。私達は何のために研究するのでしょうか。研究保育のためにでしょうか。それとも研究会に発表するためにでしょうか。あるいは、本に書いてあるような保育をやってみるために研究をするのでしょうか。——ちがいます。これでは、研究の動機、目的が本末でんどうしていません。私達が保育の研究をするのは、学説のためや本のためでもなく、研究発表のためや幼稚園のためでもありません。それは、今更に新しく云うまでもなく、幼児たちのよりよい成長のために、よりよい保育をするためにするのでなければなりません。このように本

来、保育研究は保育の実践と深く結びつくべきものです。このことを忘れた、研究のための研究とも云えるような研究態度の人が時々見られるのは——とくに保育の現場にあられる保育者が、何よりも自分達の強味である実践の場を離れて、方向ちがいの動機から保育研究をしようとするのは、——非常に残念なことであると思います。

要するに、保育研究は、私達に対して、外から与えられる問題について研究されるものではなく、またいわゆる理論家の唱える理論を証明したり、実験したりするためになされるものでもありません。私達の現実の保育の場における保育の実践から提出される問題について、——日々の保育の実践のうち、ゆきづまったことや困ったことがらが問題として提出され——その解決の仕方を要求するものです。したがって問題は保育の実践によつて発見され、その解決を要する問題の所在がはつきりと設定されなければなりません。いわゆる保育のゆきづまりを打開するものが、保育研究です。たえず、保育研究によつて、問題を解決しながら進むものには、ゆき

つまりはありませぬ。ですから、研究問題は私達一人一人の置かれた条件によって異なるものであって、一般的に、どんな形で、どんな規模で設定せられるかをきめることはできません。外から見れば、ささやかな、つまりぬ問題とみえるものであつても、ある先生が幼児のために、それを解決し、処理しなければならぬものとすれば、それは、その先生にとつては重大な研究問題となります。

ここで問題になることは、大学の保育学と保育の現場との関係についてです。従来はこの二つが、本当の内的な関係を持たず、ばらばらであつたのが、日本の保育界の弱点であつたと云えると思いますが、これからは両者の関係はどうあるべきでしょうか。現実の問題の解決に役立つ保育学は結局無意味であることは確かです。けれどもまた、現場の具体的な問題をただ現象的に追いかけて、その一つ一つに対症療法的な手当をしようとしても、それが果して根本的な解決になるかどうかは疑問です。一つ一つの現象的な問題は整理され、相互の関連や構造が明らかにされ秩序だてられることが必要です。そのために

は、一方、学者あるいは研究者側が何といつても、保育の現場の問題にもつと本気で目を向け、現場の保育者と一しょに、その解決に努力することが必要です。日本の学者や研究者は、ともすると日本の現代の保育の実情を問題にするのではなく、外国の書物のほん訳や紹介から出発し、時とするとそれだけで終つてしまふきらいがあります。そういう「やきなおしの学問」では、保育の現場の要求に本当に應ずることができないのは当然です。

けれども、一方ではやはり現場の保育者の協力が必要です。日々に解決を要する多くの問題に追われている現場が、それを解決してくれない保育学に対して不信をいだくのは、もつともなことではありますが、保育学を本

当に役立つものにするためには、現場の積極的な協力が必要なのです。そのためには生きながら問題を学問に投げつけることです。学者や研究者がために本当の問題をとりあげなければならなくなるまで、何度でも強く、しつこく訴えることです。どんなささやかな形ででも、どんなつまらないような問題でも。それとともに、もう一つ現場の保育者にお願ひし

たいことは、やはり、現場の保育者の識見、教養を向上するように努力していただきたいということ。ただ何でもやたらに困つてゐる問題を提出するのではなく、その間の軽重本末を見きわめるだけの識見。いたずらに流行にわづらわされたり、人の云うことに一々引きまわされたりしないで、しっかりと現実に脚をつけて迷われない識見がほしいものです。

今後更に大学の保育学の学者や研究者と、現場の保育者とが手をたづさえて、よりよい保育学の建設のために——ひいては、保育の発展のため、幼児たちの幸福のために——協力の実をあげてほしいと思います。

前にも述べました通り、保育に関する研究は、大学の研究室に限られるものではありません。もちろん、研究室における学者の研究もありますが、それと同時に、幼稚園・保育所において、はじめておこなうことのできる研究が沢山あります。つまり、研究室や実験室のように、特別な条件のもとではなく、普通の条件のもとで、保育が現実に行われている

園においてこそ、はじめて完全におこなうことのできる研究があります。しかも、実際の保育に対して、もっとも大きな貢献をするのは、このような現場においての研究です。ですから、園長や保育者は皆保育研究上重要な責任をおわされているわけです。したがって園長は、出くわす種々の問題に対して、研究的な態度をとるべきですし、またその配下にある保育者の研究的態度を刺げきし、その研究を發展させるように力を尽さなければなりません。

けれども、保育者や園長が研究に従事するのは、現状では、多くの障害があります。その障害の一つは研究に必要な時間とエネルギーの不足であります。多くの場合において保育者の負担は過重であつて、研究するための時間がありません。何とか工夫をして、研究時間を作つてほしいものです。更にそれ以上に、現場における保育研究の障害となるものは、恐らく多くの保育者が、研究法を知らないことでしょう。今回は紙面の関係上、この点に触れられないのは残念ですけれども、今後機会あるごとにお話ししてみたいと思つ

ています。

与えられた紙面がもうほとんどなくなつてしまいましたが、まともなりませんでしたが最後に今後に残る保育研究の問題を簡単にあげてみましょう。

1、幼児期の成長と発達に関する研究

外国の子供についての発達標準はよく紹介されていますが、日本の子供の発達標準の研究が乏しいようです。現在日本保育学会の共同研究が進行中ですが、これが完成すれば、画期的なものとなるでしょう。尙今後の問題としては、標準的な発達からのずれの問題、つまり発達の個人差について研究すべきでしょう。又いろいろな能力のレイネスについての研究も必要であると思ひます。

2、幼児教育に関する研究——保育カリキュラムの作製について、こちらから幼児にあ

てがうのでなく、幼児達の中から生み出すのはどうしたらよいかという問題。いろいろな保育方法についての実証的な研究——Aの保育法とBの保育法と、どちらがどれだけすぐれているかと云うような実験的研究。一人一人の幼児の才能や興味にあつた個別的保育

法についての研究。一組の幼児数をどの位にしたらよいか。(四十人は多すぎると思う)

又一園の園児数はどの位がよいかという問題。音楽リズム、絵画製作等々の個々の保育内容についての理論的研究。

3、幼児教育の効果に関する研究——何年間保育するのがよいか。(一年保育、二年保育、三年保育の比較研究)小学校に入学して

から後の、幼稚園に行かなかつた子どもと行った子供の成長発達についての比較研究。幼稚園教育の効果があるのは、どの方面の発達においてか。効果がないのはどの方面か。

4、特殊保育に関する研究——盲児、ろう

児、精神遅滞児、肢体不自由児、天才児などの保育について、保育内容、保育方法等の研究。

5、保育者に関する研究——保育者の望ましい資質について。保育者の精神衛生について。保育者と幼児との関係について、保育者

の幼児に及ぼす影響に関する実証的研究。

6、政治的経済的問題に関する研究——幼稚園と小学校との関連性について(教育制度

・教育行政)幼稚園・保育所間の問題。幼稚

園・保育所の施設・設備等の問題。教育財政問題。

要するに、保育研究は、何も学者や専門研究者の独占するものではありません。私達一人一人が研究者としての責任を負っているのです——幼児達の幸福のために。自分には研究者としての資質がないなどと弱音をほかないで、どんな小さな問題でもよろしいから勇敢に一つの問題ととくんで下さい。若し自分一人の能力では手におえない時には、共同研究をしてごらん下さい。いろいろな方面の資質、能力を持つている人々が共同して、一つの問題とまとめた課題に立ち向えば、難しい問題でも解決できます。ともあれ、私達は、基礎的な識見、教養を高めるように、いつも心がけてゆきたいものです。

参考文献——左に掲げる文献は、私がこの文を書くにあたって参考にしたものですが、これらの文献は、同時に、これから保育研究をしようとする人にとっても、研究のよい手引となるでしょう。

1、城戸幡太郎 幼児の教育 福村書店

昭和二五年

2、宗像誠也 教育研究法 新評論社 昭和二九年

3、阿部重孝 教育研究法(岩波講座「教育科学」第二十冊) 岩波書店 昭和八年

4、石山脩平 教育研究分野の概観(教育大学講座三五「教育研究法」) 金子書房 昭和二六年

個々の研究方法を十分に会得したいと思ふ人にとっては、これらの文献では不十分です。その場合には、それぞれの方法によつて今までになされた研究の報告を精読するのが、もっともよい勉強法であると思います。それには、

5、月刊雑誌「児童心理」 金子書房

6、「幼児の教育」 フレーベル館

7「保育」 昭和出版

にのつてゐる研究報告がよいでしょう。

(この一文を草するに当り、特に宗像誠也先生の御指導に対し、厚く御礼申し上げます)

(神戸頌栄保育短期大学)

▽5頁より続く 部屋があまりに明るすぎて子どもが自ら遊ぶ場所を自然に窓を遠ざけている実際をみるときに、これ等の点についても大人は考えさせられることも多いのではなからうか。すべては子どもの生活する場として最もよかれと考えることで常に現在に満足することなく、よりよき環境ふんいきの考慮は勿論であるが、あまりに極端なゆきすぎはお互にいましめたいものである。

日本私立幼稚園連合会編纂

全国私立幼稚園名簿

B 5頁 二二〇頁 頒価一五〇円

〒 一六円

発売所 株式会社 フレーベル館